

2022年4月24日・主日礼拝メッセージ

説教題：「御前に静まる時」 聖書箇所：マルコ1：35－39

みなさん、おはようございます。今朝は、神学校を卒業し、補教師となってから、はじめて、礼拝でみことばを語らせていただきます。神学生の時とはまた違った意味での緊張がありますね。

今朝のみことばの奉仕が決まってから、皆さんにどのようなお話をすればよいのかと考えていました。そうする中で、2つのことが心に示されました。一つは、今年の年間標語である「神を愛する者となる」ということです。本当に、良いテーマが、年間の標語として与えられているなどと思います。ですから、それにそった内容がお話できれば、という思いがありました。これについては、またあとで、結論のところで触れていきたいと思っています。

そして、御言葉の準備の中でもう一つ与えられたのが、「神様の前に静まる」ということでした。「神様の前に静まること」の大切さ、豊かさ、そこにある祝福について、皆さんにお話し分かち合いたちという思いが与えられました。これは「祈り」についての個人的な学びの中で教えられ、心に留まったことです。この4月から、同盟教団の補教師としての働きが始まりましたが、補教師の大切なつとめの一つに「祈り」が挙げられています。神学生時代の研修でも、補教師の派遣前研修でも、このことは繰り返し強調され、教会や教団のためによく祈るようにと指導されてきました。また、補教師になる際には神様と教会の前に、3つの誓約をするのですが、その一つが「教会の一致と純潔のために祈り励むことを約束しますか」というものです。補教師は、みな、このことを約束し誓約して、それぞれの働きの場に遣わされています。

神様に「祈ること」ができる、特に「親しく」祈ることができるということは、すべてのクリスチャンにとっての特権ですが、神様と教会に仕えみことばの奉仕をする献身者にとっては、たいせつな「つとめ」でもあります。ですから、「祈り」について、あらためて学びたいと思い、個人的に学びはじめました。そして、その中で最近特に教えられたのが、「御前に静まること」の大切さでした。

今日の箇所で、イエスさまは「朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられ」ます。その前の記事を見ますと、イエス様は多くの人を癒し、悪霊を追い出しておられました。それは通常では考えられない、奇跡的なお働きでした。イエス様の評判は、瞬く間にガリラヤ全土のいたるところに広まりました(28節)。そして多くの人がイエス様に癒やしていただくとして、イエス様のところへやってきました。この前日には、シモン・ペテロのしゅうとめの熱病をいやされたと、マルコは記しています。その日は、夕方になり、日が沈んでも、病人や悪霊につかれた人々がイエス様のもとに連れてこられました。同じ出来事を記しているルカ4章によれば、イエス様は、病を患っているその「ひとりひとりに手を置いて、いやされ」ていったのでした(ルカ4：40)。イエス様のもとに連れてこられたのは、病気の人々だけではありません。悪霊につかれた人々からは、悪霊を追い出し、助け出されました。肉体的にも、精神的にも、随分とお疲れになられていたことでしょう。それでも、イエス様は「朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き」、祈られたのでした。

イエス様は、このようにたびたび人々から離れて、祈られることがありました。ある時は、十二弟子を選ばれるために、神様のみこころを求めて、夜通し祈られました。またゲッセマネの園では、近くまで弟子たちをともなっておられましたが、その弟子たちからも少し離れて一人になり、十字架の苦難の前に、

苦しみ悶えながら神様に祈られました。そのように、大切なことを控えているときに、神様のみこころを求めて祈られることがありました。

しかし、今朝の箇所では、特別そのような目的が明らかにされているわけではありません。どちらかと言うと、あえて寂しいところに行かれ、神様の御前に静まり、祈るときをもつこと自体が目的であったように思われます。そうでもしなければ、イエス様は一人になることもできない状況の中にもありました。事実、イエス様がせっかく一人で祈っておられたところに、シモン・ペテロたちがイエス様を追ってきて「みんながあなたを捜しております。」と言いに来たのでした。

今朝のこの箇所では、イエス様がどのような祈りをされていたのでしょうか。残念ながら、ゲッセマネの園での祈りのような、祈りの内容についての説明はありません。しかし、それは父なる神様との豊かな交わりのときであったことでしょう。別の箇所で、イエス様は、弟子たちに向かって「わたしを遣わした方のみこころを行い、その御業を成し遂げることが、わたしの食物です。」(ヨハネ4：34)と、後に語っておられます。父なる神様のみこころを知り、それをなされることを糧としておられたのです。イエス様にとって、神様の前に静まり、祈るときとは、そのような恵みのときなのでした。

私たちは、「祈る」ということを、神様にむかって私たちの願いを述べることであると考えがちです。私たちの状況や願いを神様に知っていただくことが、私たちの「祈り」の大半を占めていることがよくあります。そのような祈りが間違いであるわけでは決してありません。神様により頼み、心のうちにある思いを打ち明けて、助けを求める祈りは、詩篇の中にも多く見られます。苦しくつらい状況におかれているとき、叫ばずにはいられない状況の中で、神様に呼び求めることができるというのは、「祈り」の恵みの一つです。私たちには、私たちの思いのすべてを知ってくださり、受け止めてくださる方がおられるのです。しかも、それがこの世界を造られ、治めておられる全能の神様なのです。このことがどれほど大きな励ましになることでしょうか。どんな状況の中にあっても、主が私たちの祈りに耳を傾け、それを心に留めてくださる。主を信じる者にとって、祈りには本当に大きな意味があります。

しかし、「祈り」の恵みは、私たちの願いや思いを神様に知っていただくということだけにあるわけではありません。そもそもの話をするならば、神様は私たちがその思いを口にする前から、私たちの心の中にあること、私たちを取り巻く状況、そして私たちの知らないことまで、そのすべてをご存じのお方です。それでも、主は、私たちに祈るようにと教え、祈ることを勧めています。そして、私たちの祈りに心を留め、私たちの言葉を聞いてくださいます。なぜでしょうか？ここにも、私たちは神様の愛を見ることができます。私たちの思いや願いは単なる“情報”ではありません。主は、私たち一人一人に人格を認め、一人の「人間」＝「神のかたちに造られた大切な存在」として扱ってくださいます。だからこそ、その言葉に耳を傾けてくださり、一人一人に向き合ってくださいなのです。ただお言葉のみで、離れたところにいる病人をいやすことのお出来になる権威を持っておられた主イエスが、ひとりひとりに手を置いて癒されたように、主は私たちの「声」を、私たちの「祈り」を聴いてくださるのです。

それでは、私たちはどうでしょうか？ 祈りにおいて、私たちはどれほど神様御自身のことをお思い、また神様の言葉に耳を傾けているのでしょうか？ 祈りにおいて大切なのは、はたして私たちが語ることなのか、それとも主がお語りになられることなのか？ 祈りにおいて学んでいた本から、私は、そのような問いかけを受けました。祈りはよく、神様との会話に例えられます。そして、実際にそのようなものです。

しかし、その会話は、私たちがまず、口火を切って神様に語りかけののだろうか。祈るというのは、そういうものなのか？と、その本は問いかけていました。そして、更に、「つまるところ、祈りにおける我々の神との関係で第一の地位を占めるのはわれわれ人間であるか、どうか？これが問われるべきである。」とまで述べていました。そのように問われたなら、私たちはもちろん、主がお語りくださることこそが大切なのだと答えるのではないのでしょうか。つまり祈りにおいて、主がお語りくださるのを待ち、その御言葉を「聞く」ことが大切だということです。

ただ、神様の御声を私たちはどうやって聞くのでしょうか。実際に人の声のような音声として、神様の「声」を聞くわけではありません。それはあり得ないことではないかもしれませんが、非常に稀なことです。通常は、御言葉を通して、また日々の出来事を通して、心に語り掛けられるわけです。私たちは、聖書を読んでいるときに、何か珍しい体験をしたときに、みこころが示されたように思うことがあります。しかし、その全部が本当に神様からきているものであるかということ、そうではないということ、私たちは体験的に知っています。御心だと思っていたことが、勘違いだったという経験は、誰にでもあると思います。どうしてそういうことが起こるかと言うと、みことばを受け取る私たちの心や思いが、罪の影響を受けて曇っているからです。私たちは自分の都合の良いことや、自分の思い描いているイメージに合うことを受け入れやすいものです。周りの環境の影響を受けやすく、日々の営みに引きずられやすいのです。不安になる出来事があれば後ろ向きになり、物事が上手くいっているときは楽天的になります。そういう日常の営みの中では、私たちは勝手に神様のみこころをイメージし、都合よく思いこむということが起こります。

だからこそ、私たちは、神様の御声を聞くために、日常を離れ、静まる必要があります。寂しい荒野へと退く必要があるのです。神様の御声は、この世の思いから離れて、神様御自身に思いむけ、神様に集中することによって、はじめて、よく聞くことができますようになります。神様は、私たちの願いや祈りを、単なる”情報”として扱っておられるわけではないと、先ほど申し上げました。私たちの祈りに耳を傾けて、私たちの「声」を聞いてくださるとき、神様は私たち自身に心を留めていてくださるのです。ある人の、内なる声を聞こうとするなら、その人の全身全霊に意識を向け、その人自身に向き合う努力を、私たちはするのではないのでしょうか。神様御自身に心に向けることなくして、神様の御声を「聞く」ことはできません。本当の意味で、神様の御声を「聞く」ということは、全身全霊をもって神様を思うことから始まります。そうして神様に心に向けるとき、神様はそこに居てくださり、確かに、私たちと共に居てくださいます。そこには、神様のご臨在があり、神様との豊かな交わりが実現します。

礼拝のワーシップでも賛美し、またゴスペルアワーでよく歌っていたワーシップソングに「STILL」という賛美があります。日本語の曲名は「静まって知れ」ですが、この賛美は、詩篇46：10の御言葉をもとにつくられた曲です。新改訳聖書で、「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」となっている部分は、「静まって、わたしこそ神であることを知れ」と訳すこともできます。それが曲の題名になっています。その詩篇46篇の続きは、「わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」とあります。神様の御前に静まり、この方こそ神であると知るとき、わたしたちは神を神としてあがめることになります。それはもはや「礼拝」でもあるのです。

「祈り」にも「礼拝」にも、このようにこの世から離れて、神様との親しい時間を持つという面があります。そして私たちは再び、この世へと遣わされていくのです。そのための、この世の中に遣わされていくための力を神様からいただくのです。そういう意味では、「祈り」と「礼拝」は通じる場所があります。私たちは、週に一度、それぞれのところから集り、ともに神様のご臨在のもとで、神様を思い、御言葉を聞き、感謝と賛美を捧げます。そして、糧を得て、祝祷をもって背中を押されて、再びこの世へと遣わされていきます。その中心にあるのは、神様のご臨在であり、神様との出会いです。

祈りにおいて、静まって神様の前に出るのも、週に一度こうして時間を取り分けて集い、礼拝において、神様の前に静まり、御言葉に耳を傾けるのも、どちらもこの世から離れて神様のご臨在に触れるとき、神様との親しい交わりのときです。私たちを新しくし、内側から強めてくださるのは、神様にしかできません。私体の内なる霊を奮い立たせるのは、神様が与えてくださる聖霊の働きです。この世の中のものに私たちに力を与えたとしても、それは一時的なものです。この世のものは、この肉の体の命を支えるのにいくらか役立つかもしれませんが。しかし、枝である私たちは、ぶどうの木であるキリストの命に与り、主イエスの命に生かされている者です。私たちに、霊に命を吹き込むのは、ただキリストのみです。この世から離れ、神さまの臨在に触れ、御言葉に励まされ、霊の糧を得て、私たちは、再びこの世へと送り出されてゆく、見えない力を得るのです。それが、毎週の主日の礼拝の中で、そして祈りのうちに神様の御前に静まる時に与えられる恵みです。

イエス様は、寂しいところに退いて祈られ、父なる神様との交わりの時を持たれた後、近くの別の村里へ行き、福音を知らせるための働きへと再び戻って行かれました。更に 39 節を見れば、「こうしてイエスは、ガリラヤ全地にわたり、その会堂に行き、福音を告げ知らせ、悪霊を追い出された」と記されています。主イエスも、祈りの中で父なる神様と交わりに、力を与えられ、神様の働きのために、再び世へと遣わされました。

ところで、それでも私たちは、なかなか祈りの中で「御前に静まる時」を持つことができないということはないでしょうか。神様の「御前に静まる時」を妨げるものが、私たちの周りにはいくつも思えるように思います。日常の忙しさや思い煩いは、容易く私たちの心を占領してしまいます。忙しくて、落ち着いて祈る時間が取れない。その気持ちも状況も私はよく分かります。また、エデンの園で罪を犯したアダムが神様の御顔を避けて隠れたように、神様の御前に出ることに恐れとためらいを感じることもあるでしょう。聖い神様の御前に出る時、私たちは自らの罪深さもまた思い知らされるからです。こんな自分が神様の前に立つ資格はないと考えてしまうこともあります。

しかし、ここで、私たちが思い出すべきであり、目を向けるべきであるのは、神様がどのようなお方であるのか、そして特に、神様が変わらぬ愛をもって私たちのことを愛してくださっているという事実です。ローマ 5：10 では、「**私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**」と語られています。神様は、私たちがまだ罪人であったときににも、私たちを愛し続けてくださり、御子であるイエス・キリストを私たちのために送ってくださったのです。また、Iヨハネ 4：10 では、「**10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」とも言われています。祈りの中で、罪が示され責められるようなときも、その背後には神様のご愛があります。つらく悲しい出来事の中で神様の愛が分からなくなるような時があっても、主の愛は変わることはありません。

祈りの中で神様の御前に静まるのが難しいと感じるとき、神様が為してくださった数々の素晴

らしい御業と恵みを思い返してみましよう。その創造の御業のすばらしさを思い巡らし、私たちに救いを与えてくださった日のことを思い出してみましよう。昨日起きた出来事や、今日誰かを通してあたえられた思いという、身近な出来事の中で、神様が働いてくださったと思えることはなかったでしょうか。神様がなしてくださったことに目を留め、その恵みを数えるとき、私たちの心は自然と神様に向けられていきます。

祈りの中で、神様に心に向け、その愛と恵みの確かさを再び確認することができたのなら、静まってこのお方こそ神であると知ることができたのなら、その後が続いていくこれから先のことについて、将来のことについて祈る、その祈りにも神様は最もふさわしい解決を与えてくださるのだと、確信をもって祈ることができ、また委ねることができます。

今年の年間標語は、「神を愛する者となる」ですが、そのために私たちに最も必要なのは、神様の愛を知ることです。御言葉を通して、礼拝を通して、日々の日常の小さな出来事を通して、いろいろなことを通じて、私たちは神様の愛を知る機会があります。神様の御前に静まったときに、私たちがそれらを思い出すなら、主がどのようなお方であるかをより深く知ることができるでしょう。神様の愛をより深く知り、神を愛する者へと変えられていくのです。御前に静まるとき、神様がお語りくださる言葉には、その根底に私たちへの愛が溢れています。

お祈りいたしましよう。